

# — 鏡 展 —

市内出土のかがみたち



熊谷市内からは24面の鏡が発見されています。展示ではこれらの出土鏡と所蔵者より提供された写真をもとに、鏡の種類や使用方法などを紹介します。

市内最古の鏡は古墳時代のもので、市内の前方後円墳などから出土しています。大半が小形品で日本で作られた倭鏡です。姿見としての本来の性格以上に、権力の象徴として、また宝器的な使い方をされていたらしく、鏡をまねて作られた鏡形石製品・土製品などが村の中からも出土することもあります。

奈良時代以降は寺院や霊山での仏教行事にも使用されていましたが、前代と同じく中国からの輸入品や、もたらされた鏡を手本として日本でも作られていました。

平安時代以降は、自然の草木花鳥を主題とした和風の鏡（和鏡）が作られるようになり、経塚に埋納されたり、墓に副葬された発見例が多くなります。

江戸時代に移り、一部の人々や特定の行事にとどまっていた鏡の使用は、やっと一般庶民まで普及します。鏡面の一方に柄が付き、扱いやすく作られた鏡が流行しました。

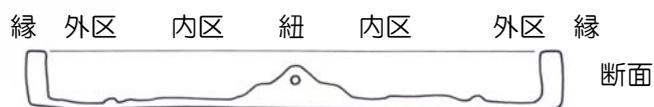
それぞれの時代の鏡は背面の意匠がさまざまで、美術品としても大切にされています。今はさびに覆われ輝くことはありませんが、どのような人々の姿を映したのでしょうか。

熊谷市内出土鏡一覧表

No.	鏡名	出土地	時代	No.	鏡名	出土地	時代
1	重圈文倭鏡	船木山下	古墳	13	松喰双鶴鏡	大我井経塚	平安
2	獣文倭鏡	伝鎧塚古墳	古墳	14	松枝双鳥鏡	大我井経塚	平安
3	内行花文鏡	北島遺跡	古墳	15	草花双鳥鏡	大我井経塚	平安
4	四仙騎獣八花鏡	寺内廃寺	奈良	16	唐草楓蝶双鳥鏡	大我井経塚	平安
5	瑞花文八稜鏡	北島遺跡	平安	17	籬菊花鳥鏡	大我井経塚	平安
6	瑞花鴛鴦八稜鏡	一本木前遺跡	平安	18	菊花双鳥鏡	万吉下原遺跡	鎌倉
7	瑞花鴛鴦八稜鏡	伝 中条	平安	19	菊散亀甲地双雀鏡	伝 野原	鎌倉
8	蔓草文鏡	伝 中条	平安	20	菊花双雀鏡	伝 野原	室町
9	山吹双鳥鏡	大我井経塚	平安	21	州浜梅花双鳥鏡	御正新田 笹山稻荷	鎌倉
10	山吹双鳥鏡	大我井経塚	平安	22	鏡（所在不明）	伝 甲山古墳	古墳
11	菖双鳥鏡	大我井経塚	平安	23	鏡（所在不明）	伝 王塚古墳	古墳
12	双鳥文鏡	大我井経塚	平安	24	鏡（所在不明）	伝 楓山古墳	古墳

## 用語解説

- 倣製鏡 原型の鏡をまねて日本で造った鏡
- 踏み返し鏡 鏡本体を型にして日本で造った鏡
- 倭鏡 弥生時代～古墳時代に日本で造られた鏡 鏡造部などの工人により日本で造られた鏡とされる
- 円鏡 円形の鏡体（縁のかたち）をした鏡
- 八稜鏡 稜部を持った鏡 六～八の稜部をもつ 平安時代に流行する代表的な鏡体
- 八花鏡 花卉状（円弧）の縁を持った鏡 四～八の花弁をもつ 奈良時代に流行した
- 唐式鏡 日本に輸入された唐鏡 また日本で造られた唐鏡で花鏡、八稜鏡や海獣葡萄鏡などがある
- 官衙 公の機関である国府・郡衙・駅家などの施設
- 和鏡 平安時代後半から草花や鳥を主題に和様化した意匠をもって日本で造られた鏡
- 柄鏡 和鏡の中で中世末から近世に作られた鏡で、手に持つために一方に柄が付けられている
- 紐 円鏡の中央に付けられた紐を通す突起、素文、怪獣 亀 花芯などさまざまな意匠がある。
- 内区 鏡の中央部に主となる文様を配置した部分で外区とは圏線で分かち
- 外区 鏡の縁に補助的に文様が配置される部分で、内区の主文様が伸びることもある



## 作品解説

### 1 重圏文倭鏡 古墳時代前期 所在不明

明治年間、甲山村雷船木山下（旧大里町）で発見されたと伝えられる。現品の所在は不明だが、残された記録から直径面径7、3cm 鈕座径2cmである。文様は鈕座を取り巻く内区に三重の圏線を巡らし、放射状の櫛歯文を配置する。外区は無紋で平縁である。倣製鏡と推定される。古墳や集落からの発見が多い。

### 2 獣文倭鏡 古墳時代中期 さいたま史跡の博物館 蔵

戦時中に中条古墳群中の鎧塚古墳から発見されたと伝えられる。面径12、4cm 鏡面厚約3mm 鈕座径2、1cmである。文様は内区内側から▽状の頭部を表現した獣を六匹、複線文と無文帯順に巡らす。外区は外向鋸歯文を二重に巡らし、平縁で無紋である。本鏡は、盤龍鏡・龍虎鏡とよばれる中国後漢から魏晋時代にかけて制作されていた鏡をまねて造った倣製鏡で、かなり獣の姿が簡略化されている。獣は龍虎・僻邪・天禄（天鹿）とよばれる天界の靈獣で、災いを避けたり

消し去ったりする力を持つとされる。古墳に数多く副葬されている。

### 3 内行花文鏡 古墳時代前期 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 蔵

2001年、上川上地内の北島遺跡第2号古墳の周溝から出土した。面径7、7cm 鏡面厚約2mm 鈕座径1、8cmである。文様は内区に内向きの半円弧を六個 圏線を三重巡らし、斜行する鋸歯文を配置する。外区は無紋で平縁である。本鏡は中国前漢時代に造られた連弧文を使った鏡の倣製鏡で、円弧の間には細線で人物状の表現が認められる。弥生時代から古墳時代まで長く使われた鏡のひとつである。

### 4 四仙騎獣八花鏡 奈良時代 熊谷市立江南文化財センター 蔵

1995年柴地内(旧江南町)の寺内廃寺講堂跡基壇上から出土した。本鏡は被熱のため歪み一部は溶けているが、八花弁が残り八花状に復元している。面径11、5cm 鏡面厚約2mmで、鈕座部分は失われて残っていない。文様は不鮮明であるが、内区に鳳凰 鶴 獅子 麒麟に騎乗した仙人が飛び走り、衣裳のなびく様子が表現されている。外区の八花弁内には草花と蝶を交互に配している。本鏡は中国唐時代の鏡を元として造られた鏡で、八花鏡・八稜鏡の鏡体の鏡が知られ、官衙 寺院 祭祀遺跡などから多く出土している。

### 5 瑞花文八稜鏡 平安時代前～中期 (財) 埼玉県埋蔵文化調査事業団 蔵

1992年、北島遺跡一号溝から出土した。面径7、2cm 鏡面厚約1mm 鈕座径1cmである。縁は3カ所に稜部が残る八稜鏡である。文様は内区に大きく花や花房つけた花枝を表している。瑞花は天界に咲く花とされる宝相花などが知られる。外区には圏線を巡らし、稜部分には不鮮明な文様を鋳出している。

### 6 瑞花鴛鴦八稜鏡 平安時代前～中期 熊谷市立江南文化財センター 蔵

1993年、奈良地内の一本木前遺跡13号住居跡から出土した。布に包まれていた痕跡が鏡面によく残っている。鏡面径は11、7cm 鏡面厚約2mm 鈕座径1、2cm 花芯状をしている。文様は不鮮明だが向かい合う鴛鴦(鳳凰か)と絡み合う瑞花が表現されている。外区には草花が配されている。霊山とされる山岳や寺院などの信仰にかかる遺跡から多く出土している。

### 7 瑞花鴛鴦(鳳凰か)八稜鏡 平安時代中～後期 熊谷市立江南文化財センター 蔵

中条地内からの出土と伝えられるが、由来は確かではない。鏡面径11、3cm 鏡面厚 約2mm 鈕座径1、6cm 花芯座である。文様は摩滅(鋳潰れ)のため鮮明さに欠けるが、内区は向かい合う鴛鴦(鳳凰か)と草花で埋め尽くし、外区も草花を一杯に配置している。

### 8 蔓草文鏡 平安時代中期～後期 熊谷市立江南文化財センター 蔵

中条地内からの出土と伝えられるが由来は確かではない。鏡面径11、4cm 鏡面厚 2mm 鈕座径1cm 文様は内区一杯に弧線状の蔓草を放射状に配し、あたかも菊花のように表現している。外区には圏線を巡らすが無紋縁で、縁を直角に立ち上げている。蔓草の表現は中国宋時代の鏡から文様の意匠を採ったものであろう。

### 9 山吹双鳥鏡 平安時代後期 東京国立博物館 蔵

1957年9月妻沼町立妻沼小学校の拡張工事中に4基の経塚遺構が発見され、経塚に埋納された鏡筒・刀などに伴って9点の鏡が出土したものである。1982年に妻沼町教育委員会から大我井経塚遺跡として報告されている。

本鏡は第2号経塚より出土したもので、鏡面径10、5cm 鏡面厚1、5mm 鈕座径1、9cm 花芯座である。一部破損しているが、内区に向き合う長尾鳥が山吹の花枝の中に配置され、圏線を越えた外区にも山吹が配置されている。外縁は直角に立ち上がる。

### 10 山吹双鳥鏡 平安時代後期 東京国立博物館 蔵

大我井3号経塚より出土。鏡面径8、7cm 鏡面厚0、6mm 鈕座径1cm 四葉座である。文様はやや不鮮明だが内区に山吹の花とその枝葉および双鳥を配している。外区には草花を均等に配置している。外縁は直角に立ち上がる。

### 11 萩双鳥鏡 平安時代後期 東京国立博物館 蔵

大我井3号経塚より出土。鏡面径11cm 鏡面厚2mm 鈕座径1、2cm 四葉座である。文様はやや不鮮明だが内区に上方に広がる萩の枝を配し、双鳥を加えている。外区には一部萩が伸びる。外縁は直角に立ち上がる。

## 12 双鳥鏡 平安時代後期 東京国立博物館 蔵

大我井3号経塚より出土。鏡面径8cm 鏡面厚0、5mm 腐食が著しく文様不鮮明のため報告では素文鏡としているが、文様の一部から花樹を配した双鳥鏡として収蔵されている。外縁は低い堤形をしている。

## 13 松喰双鶴鏡 平安時代後期 東京国立博物館 蔵

大我井3号経塚より出土。鏡面径11cm 鏡面厚0、7mm 鈕座径1、2cmである。文様は不鮮明だが松葉を散らした鏡面に対向して外向に飛翔する鶴を配置している。この意匠は和鏡の代表的で多くの例が知られる。外縁は低い直立する。

## 14 松枝双鳥鏡 平安時代後期 東京国立博物館 蔵

大我井3号経塚より出土。鏡面径8、9cm 鏡面厚0、2mm 鈕座径1、2cmである。文様は不鮮明だが松葉を散らした鏡面に対向して飛翔する長尾鳥を配置している。外縁は厚く低い直立する。

## 15 草花双鳥鏡 平安時代後期 東京国立博物館 蔵

大我井3号経塚より出土。鏡面径10cm 鏡面厚0、5mm 鈕座径1、3cmである。文様は不鮮明だがところどころに見える花や茎状の線から草花文と鳥を配した意匠と判断されている。外縁は厚く低い直立する。

## 16 唐草楓蝶双鳥鏡 平安時代後期 東京国立博物館 蔵

大我井4号経塚より出土。鏡面径10、5cm 鏡面厚0、7mm 鈕座径1、7cm 花芯坐である。鏡体に一部欠損があるが、文様は鮮明に残る。瑞花と鳳凰が対向して配置される。外区には楓葉と蝶を諸所に置く。外縁は低く厚い直立縁をしている。

## 17 籬菊花双鳥鏡 平安時代後期 東京国立博物館 蔵

大我井4号経塚より出土。鏡面径9、7cm 鏡面厚0、5mm 鈕座径1、2cm である。文様はやや不鮮明だが籬(竹垣)の奥に大輪の菊花が咲き誇り左方に群れ雀が遊ぶのどかな情景を描いている。外縁は低く厚い直立縁をしている。

## 18 菊花薄双鳥鏡 鎌倉時代 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 蔵

1974年、407号バイパスの路線工事に伴い、万吉地内の下原遺跡の 号墓坑より出土した。鏡面径10、6cm 鏡面厚約1mm 鈕座径1、7cm 菊花座である。文様は内区から外区に大輪の菊花を配置し、下方にススキに遊ぶ双雀を配置している。外縁は直角に立ち上がる。和鏡として広く用いられた意匠のひとつである。

## 19 菊散亀甲地双雀鏡 鎌倉時代 個人 蔵

里修験寺院であった野原大蔵院に伝わったもので、表面の腐食具合や土着の様子から出土品であったようだ。鏡面径11、4cm 鏡面厚3mm 鈕座径2、1cm 亀座鈕である。亀甲地に菊花を配した幾何学的な地文で内区外区を埋め尽くし、亀首と双雀が向き合う。外縁はやや高く直立する。

## 20 菊花双雀鏡 室町時代 個人 蔵

野原地内での出土品といわれる。野原地内には能満寺といわれる中世寺院があったとされ現在関連する能満寺・味尊堂などの地名が残されている。鏡面径8、6cm 鏡面厚2mm 鈕座径1、2cm 亀座鈕である。内区に菊花を配し二重に巡らし、その間に亀首と双雀が向き合う。外区は6分割する鋸歯文を交互に重ねている。外縁はやや高く直立する。

## 21 州浜梅花双雀鏡 鎌倉時代 個人 蔵

御正新田の通称笹山稲荷付近から出土したとされる。掘り出したときの傷があるが、外区に開けられた2孔は当初からのもので、御正体として吊り下げられたときに加工されたのであろう。鏡面径12cm 鏡面厚2mm 鈕座径2、2cm 花芯座鈕である。内区に梅花を下方に流水の流れを曲線で表現し、その間に双雀を配している。外縁はやや高く直立する

## 25 四目菱文柄鏡 江戸時代後期 柴田氏寄贈品 熊谷市立江南文化財センター 蔵 参考展示

近世には鏡の需要が高まり、量産化され、規格化されていったが、図柄は多様であった。同時に柄をつけた鏡が一般的になった。本鏡は鏡面径14、8cm 鏡面厚2mm 柄長9、6cm である。文様は 中央に四目菱を描いている。この時期の鏡は婚礼の持参品として庶民層まで普及した品である。